

360 度動画とドローン撮影による地域の魅力発信の可能性

Possibility of disseminating local attractions by 360 movie and drone shooting

早川 渉¹

Wataru Hayakawa²

要 旨

2018～2019 年度に行われた札幌市からの委託研究「地域活動（地域動画の制作）の実践的研究」の活動を振り返り、その成果と課題を検証、分析する。

2 年間、四季を通じて札幌市南区の景勝地「石山緑地」「札幌芸術の森」「豊平峡ダム」「国営滝野すずらん丘陵公園」「定山溪温泉」「札幌藻岩山スキー場」の 6 カ所をドローンによる 4K 動画の撮影と、ドローンに搭載した 360 度カメラで 360 度動画を撮影した。各動画は、札幌市南区の魅力を発信するためのツールとして使用。市内の公共ビジョンや youtube 上で公開された他、360 度動画は VR ゴーグルを実際にかけてもらうイベントで一般市民に公開。動画視聴によって地域の魅力がどう伝わるのかを対象地域毎の特性や動画自体の表現特性などを踏まえながらその効果も検証した。本稿では、自治体がこのような新しい媒体で地域を PR する意義とその可能性を論じる。

キーワード：, 動画制作, 地域振興, フィールドワーク

Keywords: Video production, Regional promotion, Fieldwork

1. はじめに 研究の背景

札幌市では、2007 年 4 月に自治基本条例を施行し、「身近な地域のまちづくりへの参加」を重要な施策の一つとして掲げている。このことを受けて、2013 年度に東海大学国際文化学部地域創造学科吉村卓也教授（以下、吉村教授）の研究室の学生を中心とした「東海大学取材チーム」と「札幌市立大学大学院デザイン研究科」、「新川高校放送局」という 3 つの学生団体による「地域 i (アイ) 動画」が制作された。この動画制作・研究は、若者の視点による新たな地域の魅力発見と、若者のまちづくり活動への参加意識の啓発を目的としていた。また、吉村教授は自身の研究課題でもある「ドローンによる地域動画制作」の研究活動の一環で札幌市南区の真駒内公園や石山緑地の動画などを撮影し札幌市に寄贈してきた。吉村教授は 2017 年度末をもって退職されたが、その研究成果や機材などの一部は筆者が引き継ぎ現在に至る。

本稿で取り上げる 2018～2019 年度に行われた札幌市からの委託研究「地域活動（地域動画の制作）の実践的研究」は、このような実績や背景を踏まえ、札幌市から実施を持ちかけられ実現したものである。

本稿では、年度ごとにその研究概要を述べ、その後具体的な実施内容を振り返る。最後にその成果と今後の課題や展望を述べていきたい。

¹ 東海大学国際文化学部デザイン文化学科, 005-8601 札幌市南区南沢 5 条 1 丁目 1-1

E-mail: w-hayakawa(a)tsc.u-tokai.ac.jp

² Department of Design and Culture, School of International Cultural Relations, Tokai University, 5-1-1 Minamisawa, Minami-ku, Sapporo 005-8601, Japan; E-mail:w-hayakawa(a)tsc.u-tokai-ac.jp

2. 2018 年度の実施概要

2018 年度に実施した「地域活動（地域動画の制作）の実証的研究」は、札幌市南区の地域資源、歴史などを被写体に、地域の魅力を広く市民に伝える 360 度動画を制作し発表することによって、

- ① 多くの市民に対して地域への愛着とまちづくりへの参加を促すこと。
- ② 大学における最新の研究内容を取り入れることにより、地域の新しい魅力発見に寄与すること。
- ③ 地域の魅力発見とともに南区の魅力に触れた様々な市民の意識を調査検証し南区の地域活動の活性化につなげていくこと。

を目的とした。

研究期間は 2018 年 4 月 1 日から 6 月 15 日まで。期間がかなり短い理由は、完成した動画を一般公開する具体的なスケジュールがあらかじめ決まっていたためである。札幌市南区が一般向けの広報ブースを 6 月 23 日、24 日に国営滝野すずらん丘陵公園で開催される国内アーティストのライブ公演に合わせて設営。そこで来場者に向けて動画を見てもらう予定で、それまでに研究を終わらせ動画を完成させる必要があった。

2.1 撮影場所の選定

非常にタイトなスケジュールの中で、まずは撮影場所の選定を進めた。候補地は以下の 6 ヶ所である。

- ① 北海道立真駒内公園
- ② 石山緑地
- ③ 定山溪温泉
- ④ 札幌芸術の森
- ⑤ 豊平峡ダム
- ⑥ 国営滝野すずらん丘陵公園

いずれも、南区を代表する景勝地である。この中から、札幌市の管理施設で許可申請が比較的簡単な②と④が選ばれ、次にドローン+360 度動画の効果が期待出来るダイナミックなダム放流が見どころの⑤が選ばれ、撮影の準備が進められた。

2.2 撮影機材の選定

撮影に使用した機材は以下のものである。

○ドローン機体 DJI 社製 inspire2

一般に販売されているドローンとしては最高品質を誇るプロ用機材。今回は通常の 4K 動画撮影がメインではなく、360 度カメラを吊り下げる形での撮影になるので、大型で安定性能が高い本機を選んだ。

○360 度カメラ RICOH 社製 THETA V

一般向けに販売されている 360 度カメラで最も一般的で信頼性が置ける機材。動画のクオリティとしてはさらに高画質の機材もあるが、高価で重量があることから、360 度カメラとして

は非常に軽量な本機を選んだ。

ドローン機体に関しては、ドローン操作を委託した株式会社エンターリム（以下、エンターリム）の所有機材。360度カメラは筆者所有の機材である。

2020年2月現在では、本研究で行ったようなドローン+360度カメラによる撮影は一般的なものとなり、ドローン機体のメーカーからは360度カメラ搭載用のキットなども発売されているが、本研究を始めた2018年4月当時にはそういった機材はまだ存在しておらず、ドローンを販売しているDJI社の担当者やエンターリムのパイロットと相談をしながら試行錯誤で取り付けキットの開発を進めた。(図1)

2.3 撮影と編集

2018年5月21日に石山緑地にて最初の撮影を行った。札幌市の公園使用許可の関係で撮影時間は早朝5時から7時まで。学生の補助スタッフも含め5名で撮影を始めた。(図2)

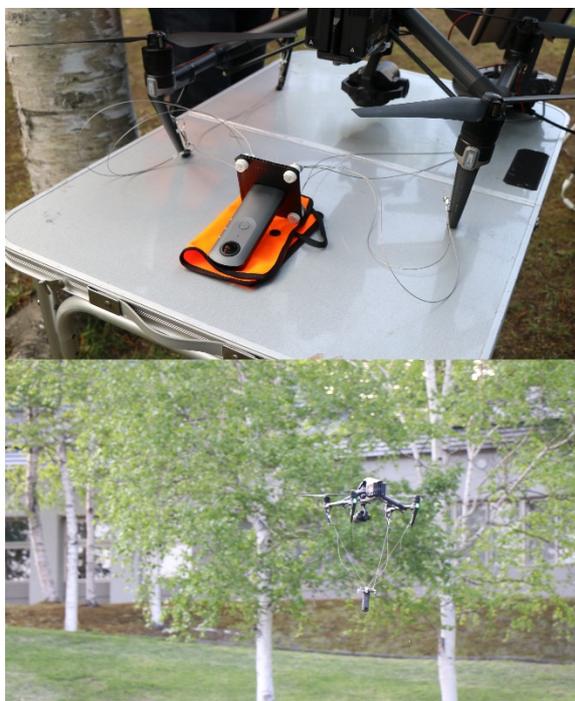


図1 自作の取り付けキット



図2 石山緑地での撮影

当日は天気にも恵まれ、1時間ほどで撮影は終了。しかし、後で撮影素材の確認をしたところ、360度動画の画質に問題があることが判明した。撮影に使用したTHETA Vは軽量で比較的安価なコンシューマー向け製品のため露出のマニュアル設定ができずフルオートになる。さらに1/2.3型の極小イメージセンサーに有効画素12,000というスペックで、ダイナミックレンジが狭い。要はコントラストの強い環境に弱い特徴がある。結果、早朝の晴天下で撮影した動画は日向部分の明るさに合わせた表現になり、日陰部分が真っ黒に潰れた状態になってしまった。ドローン本体で撮影した4K動画の方はマニュアルで露出設定ができる上に、4/3型の大型センサーを搭載しているため問題はなかったが、今回のメイン素材は360度動画の方なので再撮影をすることにした。今度は、晴天を避け曇天狙いである。

再撮影は翌週5月27日。この日は朝から曇天となり、前回同様早朝5時から撮影を実施し

た。7時前には撮影を終了し、この日は2つ目の撮影地である札幌芸術の森で引き続き撮影した。残り一つの撮影地である豊平峡ダムは、6月9日に実施。この日も曇天狙いでダイナミックなダム放水の様子を撮影することに成功した。(図3)

編集作業はその後、約一週間で終了。3か所の撮影地を3分程度にまとめた360度動画と撮影地ごとに1分程度にまとめた4K動画3本の計4本の動画を完成させた。(図4)



図3 豊平峡ダムでの撮影

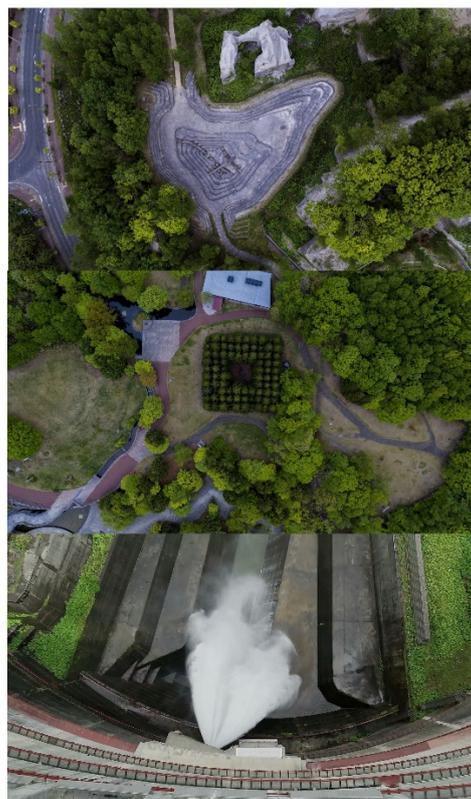


図4 完成画像からの切り出し画像

2.4 一般公開



図5 南区広報ブースの様子

6月24、25日の2日間、国営滝野すずらん丘陵公園で開催された人気アーティスト「SEKAI NO OWARI」の野外ツアー会場に設置された札幌市南区の広報ブースで、完成した360度動画を公開した。視聴方法は、

スマートフォンに保存した動画データを、THETAの専用アプリで再生し、スマートフォンを装着したVRゴーグルで鑑賞するというものである。(図5)

ブースには2日間で844名の来訪者があった。来訪者には以下の3つのアンケートを実施した。結果は(表1)の通りである。

Q1:どこにお住まいですか?				
南区内	札幌市内 (南区以外)	札幌市外 (道内)	札幌市外 (道外)	海外
79	414	257	86	8
Q2:行ったことのある施設はありますか?(複数回答可)				
石山緑地	札幌芸術の森	豊平峡ダム	なし	
139	413	316	311	
Q3:VR動画を見て行ってみたい施設はありますか?(複数回答可)				
石山緑地	札幌芸術の森	豊平峡ダム	なし	
158	183	511	32	

表1 アンケート結果

アンケートの各設問の結果とそこから読み取れる意味合いを考察する。

・Q1のアンケート結果から、札幌市南区以外からの来訪者が90%以上

→南区の魅力を発信する、という目的に合致している。

・Q2のアンケート結果から、40%近い来訪者が今回撮影した3か所の景勝地を訪れたことがないと回答

→南区の魅力がまだまだ浸透していないことが類推される。

・Q3のアンケート結果から、来訪者のほぼ60%が入ってみたい施設に豊平峡ダムを選択した。他の2施設を圧倒。

→ダム放流を上空から覗くことができる。という360度動画らしい驚きに満ちた表現が効果的だったのでは。最も票を集めなかった札幌芸術の森の場合、実際に上空から撮影すると、森の部分で施設の多くが隠されてしまい、空から覗きこんだ時の驚きにかける結果になったことも原因と考えられる。

広報ブースでの一般公開を終え、委託研究の契約期間が終了。今回の委託元である札幌市南区地域振興課の担当者からは、動画の完成度に高さとともに南区の魅力発信に大きな効果があったのではないかという評価をいただき、次年度も継続して動画制作を中心とした委託研究の申し出をいただいた。次章で今回の委託研究の評価をまとめるとともに次年度に向けた課題をまとめていきたい。

3. 2018年度の評価と課題

今回の委託研究には2章で述べたように、

- ① 札幌市南区の地域資源、歴史などを被写体に、地域の魅力を広く市民に伝える360度動画を制作し、発表することによって、市民に地域への愛着とまちづくりへの参加を促す。
- ② 大学における最新の研究内容を取り入れることにより、地域の新しい魅力発見に寄与する。
- ③ 地域の魅力発見とともに南区の魅力に触れた様々な市民の意識を調査検証し南区の地域活動の活性化につなげていく。

という3つの目的があった。それぞれの項目での評価と課題を考察する。

<①の項目>

国営滝野すずらん丘陵公園でのブース開設で2日間での844名の来訪者があり、その9割が南区以外の方であった。360度動画の体験で、今まで訪れたことのない南区の施設に対するアピールは十分出来たものと思われる。その一方でこの内容が「地域への愛着心の向上」や「まちづくりへの参加」を促す効果があったのかは、その後の調査を実施していないので不明である。動画の効果が期待されるだけに、広く市民が接することができる機会

をさらに増やす必要性を感じた。

<②の項目>

大型のドローン+360度動画という試みは成功したと思われる。ブースの来訪者や実際に体験した本学の学生たちから「見たこともない映像」「こんな見え方をするとはい！」「今度実際に訪れてみたい」などなど、地域の新しい魅力を今までにない角度から発見することができたのではないかと考える。一方で、最新の研究・技術的な側面から見ると課題はまだある。まずはいわゆる「VR酔い」対策である。今回のように360度動画をVRゴーグルで視聴する場合、動画が激しく揺れたり予測と違う動きをすることで三半規管に狂いが生じ、乗り物酔いと同じ症状が出る。この症状を起こさせないためには、動画をとにかく安定させる必要があるのだが、今回のようにドローンから360度カメラを吊り下げる構造では風の影響やドローンからの振動を受け、シーンによっては予測不能な動きになってしまう。今後は機材の選定も含め「VR酔い」対策を進める必要がある。

<③の項目>

広報ブースでの2日間のアンケートで今回の動画に触れた市民の意識を知ることができ、一定の効果が上がったものと思われる。今回の研究成果をもとに地域活動の活性化に繋げていくことができるのではないかと考える。

4. 2019年度に向けてのテスト撮影と機材選定

2.4章で述べたように、2018年度に引き続き2019年度も委託研究を行うことになった。2018年度の撮影が春から初夏だったので、今回のテーマは「秋～冬の撮影」となった。中でも国営滝野すずらん丘陵公園内にある「アシリベツの滝」は厳冬期になると滝全体が凍る「氷瀑」というとても珍しい現象が起こるので、ぜひ撮影をしたいという要望があった。2月のさっぽろ雪まつり期間中のつどーむ会場に札幌市南区の広報ブースが出展されるため、一般公開は、当初そのタイミングを想定していたが、氷瀑の撮影が例年通りなら2月上～中旬になることから2019年2月の雪まつりではなく2020年の雪まつりで公開することにした。厳冬期の撮影はドローン+360度カメラによる撮影に様々な問題が生じる可能性があったため、2018年度の課題解消も兼ねて、冬期に素材撮影を兼ねたテスト撮影を何度か行った。

4.1 アシリベツの滝

滝が氷瀑した2019年2月9日にドローン+360度動画の撮影を行った。(図6) 使用機材は、前回同様の組み合わせ(DJI inspire2+RICOH THETA V)で行った。当日は最低気温がマイナス20度を超える寒さで、バッテリーの消耗が最も心配されたが大きなトラブルもなく撮影を終了できた。しかし、後ほど360度カメラの素材をチェックしたところ、ドローン機体からくる細かい振動が見られた。VR酔いを起こすほどのひどいものではないが少し気になる。今回の撮影対象が細い溪流と比較的小さな滝でドローンの速度が遅く、今まで気にならなかった細かい振動がより強調されてしまったものと思われる。ドローン本体には機体の揺れを吸収する強力なスタビライザー機能が備わっているため撮影された画像は驚くほどスムーズに再生されるのだが、吊り下げられた360度カメラにはスタビライザー機能が搭載されてい

ないため振動を吸収することができない。360度カメラの機材変更を検討することにした。

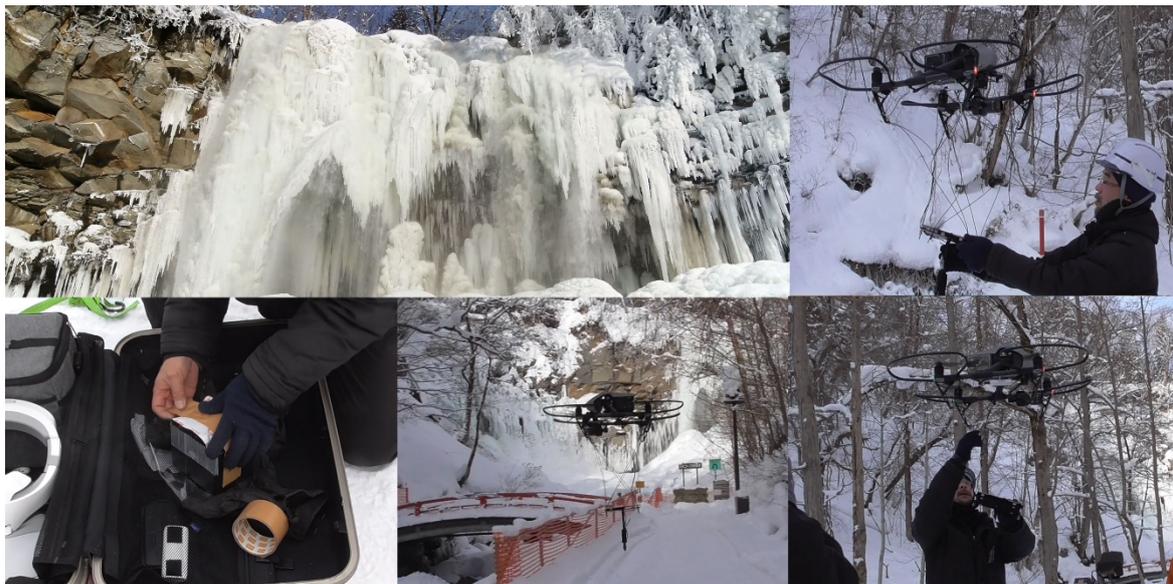


図6 極寒の中でのアシリベツの滝撮影

4.2 スノーアクティビティの撮影と360度カメラの機材変更

毎年札幌市南区で開催されている雪中のアクティビティイベントの幾つかを新しい360度カメラのテストを兼ねて撮影した。撮影日時場所と使用機材は以下の通りである。

1) 2019年1月11日 八剣山果樹園(スノーラフティング他)

使用機材 insta360社製 insta360 ONE

この機材の最大の特徴はスタビライザー性能。カメラ内に搭載された機能で手ブレを吸収してスムーズな映像を実現する。その代わりに若干解像度を犠牲にするので2018年の石山緑地などの撮影時には採用されなかった。今回はそのスタビライザー性能と冬期でのカメラ性能の確認のために使用した。結果、スタビライザー性能は素晴らしいものがあるが、画質、冬期のカメラ性能ともこれまで使用してきたTHETA Vを上回る結果は得られなかった。

2) 2019年2月22日 国営滝野すずらん丘陵公園(歩くスキー、スノーチューブ他)

使用機材 insta360社製 insta360 ONE X

2018年10月に発売されたばかりのこのカメラは、定評のあるスタビライザー機能はそのまま、解像度が3840×1920ピクセルの4K画質から5760×2880ピクセルの5.7K画質にアップ。さらに、着脱式バッテリーを採用し、スペアバッテリーを複数用意することで冬期のバッテリー問題も解決される。ほぼすべてのスペックで今まで使用してきたTHETA Vを上回る性能で価格はほぼ同じ。期待が高まる中「歩くスキー」「チューブ滑り」「スノーシュー体験」の撮影を行った。(図7) 結果は素晴らしいもので、2019年度の撮影にはこの機材で臨むことを決定した。特に優秀なのはスタビライザー機能で、動きの激しいアクティビティでも再生画像はとてもスムーズで画質の低下もほとんど感じられなかった。さらにカメラの取り付け部分を自動的に見えなくさせる機能もあり、より自然な状態で360度動画に集中出来る工夫もされている。



図7 insta360 one Xでのテスト撮影

5 2019年度の実施概要

2019年度に実施した「地域活動（地域動画の制作）の実証的研究2019」は、前年度の委託研究の内容をほぼ踏襲し、札幌市南区の魅力を広く市民に伝える360度動画を制作し、発表することによって、多くの市民に対して地域への愛着とまちづくりへの参加を促すことに加え、南区の魅力に触れた様々な市民の意識を調査検証し南区の地域活動の活性化につなげていくことを目的とした。研究期間は2019年6月20日から2020年2月29日まで。研究期間が短かったという前回の反省を踏まえたのと、最終的には雪まつり期間中の公開を念頭に置いたことでこのような期間設定となった。雪まつりでは東区のとどーむ会場で札幌市南区が一般向けの広報ブースを1月31日から2月11日までドーム内設営。そこで来場者に向けて動画を見てもらう予定で、前年度に製作した動画の他に、今年度の動画を「秋冬編」として公開する。

5.1 撮影場所の選定

昨年度、候補に挙げられながら撮影できなかった「定山溪温泉」と「国営滝野すずらん丘陵公園」のアシリベツの滝がまず決定。いずれも紅葉シーズンが撮影に適しており映像映えしそうなことが決め手になった。またアシリベツの滝は、前年度にテスト撮影を兼ねた冬の撮影をすでに行い素材もあるので、秋～冬の季節変化を効果的に見せることができることも大きな魅力だった。後1カ所は冬の景色がアピールできる場所を選ぶことにした。候補地は以下の3施設にした。

① 札幌藻岩山ロープウェイ

多くの観光客が訪れる札幌市を代表する観光地で、夜景も魅力的。ただし、山頂近辺のみが南区で、それ以外は中央区であり「南区の施設」とは言い切れない側面も。

② 札幌藻岩山スキー場

札幌を代表するスキー場。ナイター設備もあり札幌の夜景を絡めた撮影も可能。

③ 札幌国際スキー場

定山溪温泉の奥にあるダイナミックな景観とコースが特徴。昼間の撮影が前提
この中から、管理者の株式会社りんゆう観光が協力的であったことや、夜景とスキー場という

ロケーションの魅力から③の札幌藻岩山スキー場が選ばれた。その結果、2019年度の撮影地は
「定山溪温泉」 紅葉時期
「アシリベツの滝」 紅葉時期
「札幌藻岩山スキー場」 厳冬期
の3か所となった。

5.2 撮影機材と吊り下げ方法の改良

撮影に使用した機材は以下のものである。

○ドローン機体 DJI 社製 inspire2

2018年度と同じ

○360度カメラ insta360 社製 insta360 ONE X

4.2章のテスト撮影時に使用した機材を使用。スペアバッテリーも3本用意した。このカメラは、THETA V に比べセンサーのダイナミックレンジが広く高コントラストの撮影状況(晴天時)でも表現力が落ちないことからより鮮やかな映像表現が期待できる。



図 8 吊り下げ方法の改良

また、THETA V と違い、ある程度のリアルタイムモニターや撮影後すぐにプレビューができるため、モニター兼アプリ操作用に iPad を用意した。さらに、360度カメラのスタビライザー機能が優秀なため、ドローンからの吊り下げ方法も改良を加え、ワイヤー方式ではなくカーボン製のポールを使ったネジ式で、より安全性と安定性の高い方法に改良した。(図 8)

5.3 撮影と編集

2018年10月18日早朝にまずアシリベツの滝の撮影を行った。当日は晴天に恵まれ、風もなく絶好の撮影日和となった。新しい機材の調子も良く順調に撮影を終えることができた。引き続き9時頃から定山溪温泉での撮影。この地区は露天風呂がある宿泊施設が数多くあるため、ドローンでの上空からの撮影には細心の注意が必要である。事前に各施設の入浴時間などを細かく調査し、エリアごとの飛行プランを作成し撮影に臨んだ。現場は紅葉も盛りで多くの観光客が訪れている中、壮大な映像を撮影することができた。(図 9)



図 9 アシリベツの滝と定山溪温泉—カメラからの切り出し画像

今年の記録的な暖冬と少雪の影響で残り一カ所、札幌藻岩山スキー場の撮影は大幅に遅れた。当初は年内で終わる予定が、スキー場自体のコース状態がなかなか整わず、撮影できたのは2020年1月22日までずれ込んだ。当日は夕方5時から準備を始めコースにナイター照明をつけてもらいドローンをコース上に飛ばし撮影。少雪の影響が幸いしナイターのコースの一部がまだオープンしておらず無人のゲレンデを自由に撮影することができた。ナイターと夜景の撮影に関しては、低照度撮影になり画像がかなり荒くなることが予想できたが、撮影後に確認したところ画像の荒さ以上にスケール感のある映像が記録されていた。(図10)



図10 札幌藻岩山スキー場での撮影

まずは、約10日後に始まる雪まつり会場での公開に向けての360度動画の編集作業に入った。約1週間ほどで終了し、秋の定山溪温泉→秋のアシリベツの滝→冬のアシリベツの滝→冬の札幌藻岩山スキー場という流れの360度動画を最初5分程度にまとめて札幌市南区の担当者に確認。その後いくつかの修正を加え、最終的には前年度に納品した動画とほぼ同じ長さの3分に収めた。

5.4 一般公開

1月31日から2月11日まで、さっぽろ雪まつりのつどーむ会場に設営された札幌市南区の広報ブースで、完成した360度動画を公開した。視聴方法は、前年同様スマートフォンに保存した動画データを、専用アプリで再生し、スマートフォンを装着したVRゴーグルで鑑賞するというものである。(図11)



図11 雪まつりつどーむ会場の広報ブース

ブースには12日間で1804名の来訪者があった。今回は新型コロナウイルスの影響でつどーむ会場の来場者が例年の6割ほどだったが、それでも多くの方に見てもらえたと思う。今回は会場の混雑が予想されたため特にアンケートは用意せず、また昨年制作した「春夏編」と今回制作の「秋冬編」のどちらかを選んで見ってもらう方式にした。結果、多くの来訪者が「秋冬編」を選んだ。実施時期が冬期だということもあり、この結果はある程度想定した通りであった。

広報ブースでの一般公開を終え、委託研究の契約期間も2月末日までとなった。次章で今回の委託研究の考察をしつつ、2年に渡った本研究の成果と課題をまとめていきたい。

6. 2019年度の考察

今回の委託研究は、前年度と同じ概要・目的を持って臨んだ。目的に関しては

- ① 札幌市南区の地域資源、歴史などを被写体に、地域の魅力を広く市民に伝える360度動画を制作し、発表することによって、市民に地域への愛着とまちづくりへの参加を促す。
- ② 大学における最新の研究内容を取り入れることにより、地域の新しい魅力発見に寄与する。
- ③ 地域の魅力発見とともに南区の魅力に触れた様々な市民の意識を調査検証し南区の地域活動の活性化につなげていく。

という3つを挙げていた。その上で、それぞれの項目で課題も浮かび上がっていた。以下で各項目での考察を課題面の解決面を含めながら進めていく。

<①の項目>

雪まつりつどーむ会場でのブース開設で延べ1804名の来訪者があり、360度動画の体験を通して、今まで見たことがない角度から南区の施設に対するアピールは十分出来たものと思われる。また、前年度の課題として「地域への愛着心の向上」や「まちづくりへの参加」を促す効果を高めるために広く市民が接することができる機会をさらに増やす必要性を挙げていたが、解決策としていくつかの試みを札幌市と共に行った。

- ・ 360度動画のYoutube配信→札幌市広報部公式チャンネル<SapporoPRD>で配信
2020年2月現在800~2800回の再生回数。再生回数のトップは「豊平峡ダム」。配信動画によって再生回数に差が出ていることから視聴者の興味の方向性も分析できた。
- ・ 広く市民の目に触れる公共空間での公開
→札幌市管轄の公共ビジョン「地下歩行空間北2条広場サイネージ空間」や「札幌市図書・情報館大型デジタルサイネージ」での上映



図 12 地下歩道空間のイベント

多くの市民の目に止まる機会となり、また流すコンテンツ不足が問題になっているビジョン運営側ともwin-winの関係を築くことができ今後の活用も期待される。特に地下歩行空間北2条広場サイネージ空間で2019年1月19.20日に開催された「南区学生まちナカアート展 in チ・カ・ホ」では展示に合わせた石山緑地のドローン映像を配信し、ボランティアで参加した学生や来場された多くの市民の皆さんに広く「地域への愛着心の向上」や「まちづくりへの

参加」を促すきっかけとなった。(図 12)

<②の項目>

「地域の新しい魅力発見」という点では、南区の秋から冬にかけて施設の魅力をドローンや360度動画という新鮮な角度から紹介できたことは前年度同様成功したと考える。さらに課題となっていた「VR 酔い」対策についても、新しい機材を投入し適切な運用をしたことで解消された。研究期間を長めにとり様々なテストを繰り返した成果が出た。

<③の項目>

動画を通して南区の新しい魅力に触れた様々な市民の意識を調査検証し南区の地域活動の活性化につなげていくために、研究や撮影の過程を取材し、完成した動画を実際にのブースで体験して記事にしてもらおうよう、東海大学チャレンジセンター地域連携プロジェクトの学生が発行する、南区の情報発信誌「SAN+」(サンプラス)に依頼をした。学生が取材の中で、様々な角度から声を紹介。その一部を抜粋すると、

『行ったことのある場所なのに、もっと身近に感じられた』(体験した市民)

『視点が変わることでこうも見え方が変わるんだ』(体験した学生)

『外に出られない方や、体の不自由な方に是非見て欲しい』(ドローンパイロット)

『自然や芸術といった南区の魅力が詰まった映像です!』(南区の担当者)

記事は、2019年8月発行の第16号に掲載された。(図 13)
「SAN+」の発行部数は約2万部あり、南区を中心に、この記事がきっかけとなり地域活動の活性化に繋がっていくとともに活性化の担い手となる学生など若年層の意識の向上につながる事が期待される。



図 13 SAN+第16号と掲載記事

7. 意義と可能性 これからの展望

2年間の委託研究を成果とその裏返しでもある課題に分け列挙する。そこから、今回の研究で取り上げたドローン撮影や360度動画を含めた動画制作による地域の魅力発信の意義と可能性、今後の展望を考えていきたい。

<成果としてわかったこと>

- ・ 視点が変わることで南区の新しい魅力が発見できた
- ・ 地域のPRツールとして動画コンテンツはわかりやすく効果的である
- ・ 低コストで制作でき、ある程度のクオリティが得られる
- ・ イベントと絡めることで動画コンテンツはより効果的になる
- ・ 新しい技術や表現を取り入れることで耳目を集めやすい
- ・ 風景や動きにダイナミックな変化がある、分かりやすい撮影対象が視聴者の評価が高い
- ・ 撮影を通して、スタッフや学生だけではなく役所の担当者レベルまで南区の新しい発見があった

<課題>

- ・360度動画の画質クオリティがさらに向上するといいが、コストとの兼ね合いが難しい
- ・360度動画の公開方法。VRゴーグル方式はイベントでは効果的だがそれ以外は？
- ・制作のハードルが下がった分、競合との争いが激しい
- ・動画コンテンツの公開方法。更新頻度が重要で制作クオリティとともに広報力、発信力が問われる
- ・常に新しい視点での魅力発見が重要だが、肝心の対象施設が果たしてどこまであるか？枯渇の恐れがある。
- ・耳目を集めやすい(映像映え)視点ではない、新しい視点でのコンテンツ開発が必要
- ・制作にそれなりのスキル習得や時間拘束が必要なので、学生など次代の担い手の育成が難しい

これらの項目から、動画制作による地域の魅力発信の意義と可能性をまとめる。

<意義>

ドローン撮影や360度動画といった魅力的な映像コンテンツの機材がかなり安価になり、撮影や編集技術もかつての映像制作に比べてハードルが下がった今、地域の魅力発信にこれらのわかりやすく耳目を集めやすい映像コンテンツを活用することは、他との競争が激しくなっている自治体にとっては避けられないことであろう。

<可能性>

効果的に使うことができれば認知度のアップから集客まで幅広い効果が期待できる。また、住民や関係者にとっても今まで見たことがない新しい視点から地域を見つめ直すきっかけにもつながり、新たな郷土意識の芽生えや地域活動の活性化につながる可能性がある。

以上の考察を踏まえ、今後の展望や提案をまとめてみる。

- ① プロジェクトを始める場合は、動画の制作を中心に据えるのではなく、公開方法も含めたアウトプットまでの計画を綿密に形成する必要がある。
- ② アウトプットのチャンネルは様々なパターン、様々なターゲットを想定する。
- ③ 他のコンテンツに埋没しないように、様々なチャンネルに対する告知方法、広報手段が非常に重要
- ④ できれば専門の広報チームと広報媒体(SNS媒体)を作り運用したい。
- ⑤ 他の地域イベントと積極的にマッチングさせる。
- ⑥ 次代を担う若年層の取り込みを意識したい。例えば学園祭や大学祭など教育関係のイベントにより積極的に関わることなど。

8. おわりに

筆者は、元々民間の映像制作会社に勤務し、その後フリーの映像制作者として多くのテレビコマーシャルや映画、PR動画などを制作してきた。筆者の本学における大きな目標は「現場での経験を大学の授業にいかにか還元するか」であり、また研究テーマとしては「広告表現と映像デザイン」「映像教育のこれから」そして「地域社会と映像メディア」を掲げている。この2年間の委託研究は、前任者の吉村教授の研究や業績を引き継ぐ形で始まったが、研究期間を終え

ようとしている今、本研究は筆者の掲げたテーマと合致した充実した内容となった。しかしながら、本稿でも述べたように新しい映像表現を取り入れた地域活動の実践的研究はまだまだ課題が山積している。2019年度の完成動画の公開についてもこれから様々なチャンネル、媒体を使いながら効果的なPR方法を南区の皆さんと一緒に考えていきたい。

映像技術は毎年新しく更新され、ますます情報収集と研究・検証が欠かせなくなっている。今回の研究は札幌市南区からの委託という形で始まったが、引き続き自身のテーマとして継続した調査・研究を進める予定である。

(受付：2020年2月20日，受理：2020年3月12日)